

「天災は忘れる前にやって来る」のだろうか？

四宮義正

最近の災害頻発に対して、寺田寅彦の警句「天災は忘れられた頃に来る」はもう古いということで、揶揄するかのよう「天災は忘れる前にやって来る」や「天災は忘れる間もなくやって来る」という見出しの記事を見かけるようになった。気象の専門家といわれる人もそんなことを書いているのを目にした。確かに大地震・津浪・豪雨などが続くと、そう言いたくなる気持ちも分かるが、建設的でないタイトルで、残念としかいいようがない。

寅彦が「忘れる」といっているのは、〈災害があったという記憶〉ではない。〈備える〉ということである。発生した災害を十分に調査・研究し、被害を軽減する対策を強化して将来に備えよ、学校で災害を想定した教育を実施し、政治が教訓を生かして防災のリーダーの役割を果たしてもらいたい、という趣旨なのである。

日本の現状は、都合の悪いことは「忘れたふり」をして、予算を与えないということに尽きる。正常性バイアスというのは一般個人には仕方がない面があるが、政府や専門家が「忘れたふり」をしているのは怠慢・無責任としかいいようがない。

寅彦の思いが書かれている随筆はたくさんあるが「銀座アルプス」（昭和8年2月）には次のようにある。

しかしもし自然の歴史が繰返すとすれば二十世紀の終りか二十一世紀の初め頃までにはもう一度関東大地震が襲来するはずである。その時に銀座の運命はどうか。その時の用心は今から心掛けなければ間に合わない。困った事にはその頃の東京市民はもう大地震の事などは綺麗に忘れてしまっていて、大地震が来た時の災害を助長するようなあらゆる危険な施設を累積していることであろう。それを監督して非常に備えるのが地震国日本の為政者の重大な義務の一つでなければならない。それにもかかわらず今日の政治をあずかっている人達で地震の事などを国の安危と結び付けて問題にする人はないようである。それで市民自身で今から十分の覚悟をきめなければせっかく築き上げた銀座アルプスもいつかは再び焦土と鉄筋の骸骨の沙漠になるかもしれない。それを予防する人柱（ひとばしら）の代りに、今のうちに京橋と新橋との橋の袂の一つずつ碑石を建てて、その表面に掘り埋めた銅版に「ちょっと待て、大地震の用意はいいか」という意味のエピグラムを刻しておくといいかと思うが、その前を通る人が皆円タクに乗っているのではこれもやはり何の役にも立ちそうもない。むしろ銀座アルプス連峰の頂上ごとにそういう碑銘を最も眼につきやすいような形で備えたほうが有効であるかもしれない。人間と動物とのちがいは明日の事を考えるか考えないかというだけである。こういう世話をやくのもやはり大正十二年の震火災を体験して来た現在の市民の義務ではないかと思うのである。

この思いを記した記念碑が東京都中央区銀座・有楽町数寄屋橋交差点にある。昭和8年9月1日に除幕された関東大震災10周年の記念塔である。彫刻家・北村西望が制作した、兜をかぶり左手に書冊、右手に炬火を持った青年像と従えた獅子を頂く台座に、昭和8年に朝日新聞社が全国

募集して採用された「不意の地震に不断の用意」が刻まれている。こちらの方が分かりやすいが、真面目すぎるかもしれない。「天災は忘れた頃にやってくる」は人間の本性が出ていて、ジャーナリズム受けしたからこれだけ普及したのだろう。「ちょっと待て、大地震の用意はいいか」や「不意の地震に不断の用意」では面白味が無く、残らなかったような気がする。

しかし、「天災は…」は、寅彦の、というより宇吉郎の言葉である。寅彦ならこのように歯切れよく言い切った、力強い短文は出来なかったと思うのである。

「天災は…」が寅彦の著作に無いことは、かなり知られているが、その誕生を時系列でみる。

1. 昭和 8 年 2 月 「銀座アルプス」中央公論に発表。
2. 同 8 年 9 月 1 日 関東大震災 10 周年の記念塔除幕式。
3. 同 13 年 7 月 9 日 中谷宇吉郎が東京朝日新聞に「天災」という見出しで「天災は忘れた頃に来る」を寺田の言葉として紹介。(これが最も早いとされている。)
4. 同 16 年 3 月 29 日 坪井忠二が『地震の話』(岩波新書)で〈一天災は忘れた頃に来る一寺田寅彦〉と書く。
5. 同 17 年 12 月 1 日 Y.F. [藤岡由夫] が『科学朝日』で〈科学者のことば 「天災は忘れられた頃に来る」一寺田寅彦一〉を解説。
6. 同 19 年 5 月 10 日 中谷が『定本国民座右銘』(朝日新聞社)で、九月一日 震災記念日の言葉として〈天災は忘れられた頃に来(く)る…寺田寅彦〉を解説。
7. 同 19 年 9 月 1 日 中谷が朝日新聞の「けふの国民座右銘」で九月一日 震災記念日〈天災は忘れられた頃に来(く)る…寺田寅彦〉を解説。
8. 同 27 年 11 月 28 日 高知市寺田寅彦記念館の石碑「天災は忘れられたる頃来る」除幕式。

特に上記 3、6、7 の中谷の紹介文で「天災は忘れられた頃に来る」が世間に広がったと思われる。「天災は…」を枕にして書かれた文章は多いが、忘れないようにしよう・忘れたから被害があった、というパターンが多い。天変地異は避ける事ができないが、対策を立てて備えることで被害は軽減できる、という方向からの文章は少ないような気がする。その意味で初山高仁が書いている「天災は忘れた頃来る」という言葉をもって寺田の災害についての見解を代表させることはむしろ寺田が述べてきたことを忘却することになりはしまいか。」(末尾の文献参照)という危惧はその通りだと思う。やはり、専門家やマスコミは根本に立ち返って考え、報道・発信することが重要だしその責任もあるだろう。

寅彦は防災に関して何回も粘り強く発言して(書いて)いる。亡くなる直前の昭和 10 年 3 月に刊行が始まった普及講座『防災科学』(岩波書店)は寅彦の命名と示唆によるもので、監修者になっている。紹介したい文は多いが、一番思いがこもっていると思われる部分を 3 作品から引用する。

「地震国防」より(「時事雑感」のなか、昭和 6 年 1 月)

軍縮問題が一時国内の耳目を聳動(しょうどう)した。問題は—に国防の充実如何にかかっている。陸海軍当局者が仮想敵国の襲来を予想して憂慮するのも尤もな事である。これと同じように平生地震というものの災害を調べているものの眼から見ると、この恐るべき強敵に対する国防のあまりに手薄過ぎるのが心配にならない訳には行かない。戦争のほうは会議

で幾らか延期されるかもしれないが、地震とは相談ができない。

……

この恐ろしい強敵に備える軍備はどれだけあるか。政府がこれに対してどれだけの予算を組んでいるかと人に聞いてみてもよくわからない。

……

軍縮会議で十に対する六か七かが大問題であったのに、地震国防は事実上ゼロである。そうして為政者の間ではだれもこれを問題にする人がない。戦争はしたくなくればしなくても済むかもしれないが、地震はよしてくれと云っても待つてはくれない。

「天災と国防」より（昭和9年11月）

戦争は是非とも避けようと思えば人間の力で避けられなくはないであろうが、天災ばかりは科学の力でもその襲来を中止させる訳には行かない。その上に、いつ如何なる程度の地震、暴風、津浪、洪水が来るか今のところ容易に予知することが出来ない。最後通牒も何ものなしに突然襲来するのである。それだから国家を脅かす敵としてこれほど恐ろしい敵はないはずである。

……

国家の安全を脅かす敵国に対する国防策は現に政府当局の間で熱心に研究されているであろうが、ほとんど同じように一国の運命に影響する可能性の豊富な大天災に対する国防策は政府のどこで誰が研究し如何なる施設を準備しているか甚だ心元（こころもと）ない有様である。想うに日本のような特殊な天然の敵を四面に控えた国では、陸軍海軍のほかにもう一つ科学的国防の常備軍を設け、日常の研究と訓練によって非常時に備えるのが当然ではないかと思われる。

「災難雑考」より（昭和10年7月）

しかし、「地震の現象」と「地震による災害」とは区別して考えなければならない。現象の方は人間の力でどうにもならなくても「災害」のほうは注意次第でどんなにでも軽減される可能性があるのである。そういう見地から見ると大地震が来たら潰れるにきまっているような学校や工場の屋根の下に大勢の人の子を集団させている当事者は云わば前述の箱根吊橋墜落事件の責任者と親類同志になって来るのである。

まとめとして、根本順吉『江戸晴雨攷』から引用する。

毎年九月になると「天災は忘れた頃くる」という言葉が、くりかえしジャーナリズムの見出しに使われるが、私はこの言葉を好まない。すでに何回かのべたことがあるので、ここではくりかえさないが、これは寺田寅彦の言ったことではない。寺田寅彦がくりかえし強調したことは、文明の発達にともない、新しい形の災害の発生の可能性があるから、そのような可能性に対し、特に為政者はたえず気をくばり、対策を立てておかねばならぬということであった。市民が忘れようが、忘れまいが、そんなことにはおかまいなしに天災はやってくる。その対策はやはり集団の知恵としての政治に求むべきであろう。

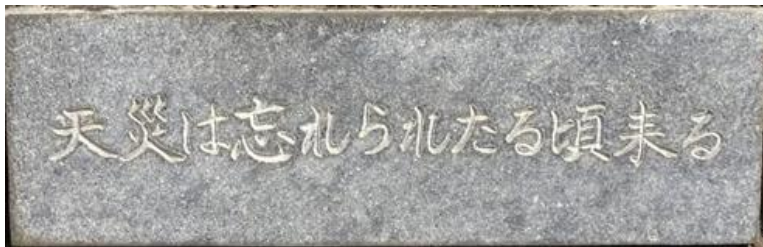
最近の東日本大震災（2011.3.11）や能登半島地震（2024.1.1）をみていると、地震や津浪を抑えることは難しくても、被害の軽減と早期復旧、また避難生活の苦労をやわらげるために、事前

に講じることのできる方策はもっとあったのではないか、と思う。政府や地方自治体、また専門家やマスコミの意識がここに無いような気がする。「天災は忘れられた頃に来る」という言葉が、政治が担うべき責任を個人に転嫁する方便に使われていないか、疑ってみなければならぬと思うのである。

注) 下線は筆者(四宮)による。

「天災は忘れられた頃に来る」関連は多くの研究文献があるが目についたものを下に記す。

- ・ 下村海南「震災記念塔 数寄屋橋畔の除幕式」(『非常時漫談』1933.12.20. 四条書房)
- ・ 根本順吉「天災は忘れられた頃来る」という言葉について(1966.9.『科学史手帖』14)
- ・ 根本順吉『江戸晴雨攷』(1993.6.10. 中公文庫)
- ・ 守山良樹「天災は忘れられた頃にやって来る」について～この警句に関する記憶と詮索～(2005.10.3. 私家版)
- ・ 神田健三「中谷宇吉郎と寺田寅彦～企画展を準備して」(2012.12.9. 雪の科学館での講演)
- ・ 初山高仁「天災は忘れられた頃来る」のなりたち(『尚絅学院大学紀要』2017.7.)



上：寺田寅彦記念館の石碑
(牧野富太郎筆)

昭和27年11月28日完成



下左：数寄屋橋交差点の関東大震災10周年記念塔
(北村西望作)

昭和8年9月1日完成



下右：「不意の地震に不断の用意」の刻字

北村の作だが、達筆過ぎるし文字が小さく汚れもあり非常に読みにくい。

周囲は高いビルと高架の高速道路で、像は埋もれている。人通りは非常に多いが、注目する人がどれだけ居るのだろうか？

(筆者撮影)